The Association of Art Education Newsletter

美術科教育学会通信 No.82

www.artedu.jp

2013年2月15日発行

主な内容

●代表理事巻頭言　●第35回島根大会案内　●役員選挙実施経過　●地区会報告　●研究ノート「幼稚園黎明期における造形表現の特質とその展開過程」「CMSによるWEBサイトの構築と活用」　●教育実践報告「美術科での多文化教育授業事例」「美術教育における小中連携の実現に向けて」　●造形芸術教育連絡協議会　●本部事務局より

巻頭言 Message from the President

美術教育研究の歴史的課題

代表理事　金子一夫（茨城大学）

1　教育や政策の逆説

随分前のことであるが、パソコンでパワーポイントの使用中にサムネイル(画像の縮小一覧)が、どう操作しても表示されないために、ソフトウェア製作元のサービスセンターに問い合わせたことがある。相談員はこともなげに、パソコンの使用者IDがローマ字ではないのではないかと言う。確かにそうであった。IDをローマ字に変えると表示されるようになった。パソコンに詳しい人は驚かないのかもしれないが、ソフトウェアの使用者IDではなく、パソコン使用者IDの文字とソフトウェア中の微小な機能が連動していることに驚いた。

教育や政策の場合でも、その目的と直接関係するはずの施策をしたのに全く効果がないことがある。それどころか目的に単純素朴に直結する方法をとると、全く逆の効果になってしまうことさえある。人間や社会は複雑なので、思い通りにならないものである。例えば子どもを将来、自由な人間にしたいという目的のため、現時点で単純に子どもを思いのままにさせる教育は、少数のできる人はでき、多数のできない人はできないままの自然状態に近くなり、不自由な多数を作り出してしまう危険がある。子どもにとって少し難しく、かつ子どもが意欲をもつような教育方法を工夫しないとうまくいかない。

2　逆説の事例

美術教育史上の例を挙げる。明治中期にフェノロサは、創造力を失った江戸期狩野派の弊を避ける目的で、絵図の模写ではなく線、濃淡、色彩の徹底的な練習から入る教育方法を提案し、東京美術学校で実践した。生徒に技能を完全に獲得させれば、後は自由な図柄(新案)を生産すると考えた。ところが、現実には生徒の表現が画一化してしまったとされる。そこで、フェノロサ退職後に美術学校長の岡倉覚三は、生徒が美術史的様式を選択して学ぶ分期教室制という教育方法に切り替えた。

また、戦後初期にGHQは図画工作科では教科書を使わないという政策を実行した。その結果、民間で各学年用の図画工作科参考書(準教科書)が大発生した。手本式ではない、今日の美術関係教科書の原形が作られた。図画工作科に検定制度が発足しても全く混乱無く移行できた。皮肉なことに教科書禁止の政策が新たな図画教科書を準備し、完成させたのであった。

社会科に関する例を挙げる。二十年くらい前に「社会科の授業を創る会」の実践に感心して、美術教育実践の参考にしたことがある。同会は歴史上のもの、例えば、青銅器、租庸調の調である麻布、古墳等を実際に作らせる。その徹底ぶりがすごい。ただ、社会科であるから、製作体験によって民衆がいかに苦役を強いられたかを理解するのが授業目標の一つになっていた。しかし、児童の感想文を読むと、校庭につくった大きな古墳の場合などは、だんだん達成の喜びが子どもに湧いているようなのである。そうであれば、民衆はモニュメンタルな建造に喜んで参加していたという逆の想像内容になりかねない。美術教育からすると、そのように想像した方がよいのではと簡単に思ったりする。しかし、それでは授業目標と違ってしまう。そして、強いられた労働はやはり苦役であったと思うと社会科教育の同僚は言う。

また、中学生時代の社会科で学んだ江戸時代の三大改革は、てっきり、成功したものとばかり思い込んでいた。しかし、大人になってから読んだ本に、経済が発達した江戸時代において単純な倹約中心の改革はすべて失敗であったと記述されていた。言われてみれば、その通りであろうと思った。ちなみに現在の中学校社会科教科書でも三大改革については扱いも小さく、うまくいかなかったようなニュアンスで書いてあった。

3　教育研究に対する教訓

このように教育や政策がその目的とは逆の結果をもたらしかねないものであることを肝に銘じたいと思う。特に教育研究専門家の役割は、教育や政策に対して誰もが思いつく目的と結果の単純な結びつきではなく、誰もが想像していなかったような結びつきを見出すことにある

と思う。誰もがすぐに思いつくような命題を証明する研究はあり得ない。自然科学では違うのかもしれないが、人文科学での研究は流行や大勢とは無縁であるべきである。もし、研究成果がすぐに広範な支持を受けたら、その研究は失敗であったと思ったほうがよい。単純に反応したい人間の感覚や心理は理解しつつも、それで失敗してきた歴史の教訓に学ぶべきであろう。過去の研究者の論説を読むと、時代や特定勢力のスローガンに即応した部分だけが無残なものになっていることがある。

4　美術教育学構築という歴史的課題

誰しも特定の状況、歴史的一回性の中で生きていて、人生には運命や出会いとしか言えない要素がある。それらによって自分が創られていくために、自分や現在の特殊性を自覚するのは難しい。自分や現在の特殊性が見えないことは、過去の世代や時代の特殊性も見えないということであり、いつも似たような現在が続いていると感じる状態である。それを脱するためには、現在や過去の特殊性を想像力で構成するしかない。

最近、筆者の学んだ大学院のことを調べてみて、筆者が受けたような大学院教育は十年間しか続かなかったことを確認した。その教育への反発も含んで、たまたま、その十年間のうちに学んだことは、現在の筆者の考えに大きく影響している。受けた教育の特殊性は漠然とは感じても、客観的に捉えるためには、それなりの調査や想像力が必要となる。

研究と教育を始めた昭和50年代に筆者は、当時の美術教育や美術教育研究の歴史性や歴史的課題、つまり特殊性を十分に認識できていなかった。当時は、それまではいなかった美術教育研究専門家としてまじめに研究するのが役目といった程度の認識であった。大学院での主任教授の指導も、あまり学問的にならないで実技も勉強するようにというものであった。歴史的課題を明確に認識できたのは、就職した後に戦後の教員養成史を調べている時であった。

以前にも述べたが、戦後の教員養成は、戦前の師範教育の反省から大学における教養教育中心の養成と免許開放制を二つの柱として出発する。前者は、教養(総合的教科内容)教育をすれば、教員養成もうまくいくといった考えに基づく。学芸大学・学部という教員養成大学・学部の旧名がそれを象徴している。小・中学校現場で現場教育がしっかりと機能していたので教養教育中心でもうまくいっていたとも言える。教員養成学部でも、全教科的に教科内容担当教官の勢いは、昭和50年代まで相当なものであった。

しかし昭和40年頃から、やはり教職や教科教育の専門性は重要であるとする政策が採られた。それが昭和39年の教員養成学部への学科目制導入と、その後昭和40年代から平成年代までかかった、全国の教員養成大学・学部への教科教育専攻大学院の設置である。

以上のような教員養成史を調べて、当時の教員養成学部の歴史的状況、美術科教育専門教員の必要、そしてなぜ東京芸術大学に美術教育学専攻の大学院が設置されたのか、教育学部の恩師がなぜその大学院受験を勧めたのかも理解できたように思う。当時、誰もそのような歴史的課題を教えてくれなかったのは、やはり過ぎてみないと物事は明確にならないというためであろう。

5　美術教育学構築の経過

昭和50年頃から意識した研究者が美術教育学の構築作業を始める。一人で全領域はカバーできないので、それぞれ分担する形になる。筆者は抽象的概念が不得手なので近代日本美術教育史を選択する。ちょうどその頃、美術科教育学会の前身である大学美術教科教育研究会も発足する。それゆえ美術科教育学会三十五年の歩みは教科教育学構築への歩みである。

美術教育学構築の作業は、現実の美術教育政策や実践と関連はしても相対的に独立するはずのものである。しかし、美術教育学構築の作業は、最初から昭和50年代の思想界と教育政策の大転換に、在るべき美術教育の姿と学的体系獲得の議論とが錯綜して複雑なものとなる。昭和52年から平成10年まで学習指導要領図画工作編も昭和40年代の整然とした系統的内容構成から、「造形的な遊び」に象徴される脱構築的・総合的な方向性へ転換する。ほとんど蓄積がないところで構築されるはずの美術教育学は、時代の脱構築的な風圧に直面して試練に晒されたのである。構築：脱構築＝モダン：ポストモダンという対比で言えば、モダンもないところで、いきなりポストモダンの嵐に遭ったということであろう。

学会発足から二十年以上たった平成10年代になっても、美術教育学研究において教育の過程的性格や教育内容・方法への考察から構築へ向かうはずの作業は、個人の内面や教育の現在性、神秘的・非合理的要素へ向かう、構築しない傾向に押され気味であったように思う。それへの疑問を表明したのが、平成14年12月の「美術科教育学会第３回東地区会」における筆者の発表「アジア的退行を超えて知的美術教育論へ」であった。そのちょうど十年後の平成24年12月に大阪で開かれた地区会「〔絵画・以降〕の時代に構想する絵画教育」は、教科内容の再定義(再構築)という視点から、改めて美術教育学構築の真正課題に立ち向かうものであったと思う。

もちろん、この十年間で美術教育研究は、以前とは比較にならないほど高度になり、現代的な問題も考察されてきた。けれども、美術教育学の成立の基準となる体系化は、研究発表の多い鑑賞教育一つとっても未だ達成されていない。体系化は地道で困難なものであるが、学会三十余年の歴史がありながら達成できていないことは、筆者を含めて学会として反省すべきことである。今後も体系構築は歴史的課題としてある。この課題が意識されていれば、個々の研究者は研究主題を無数に発見でき、かつ研究の意義を見失うこともないであろう。

ちなみに、この昭和52年から平成10年に起こった教育政策の大転換と美術教育論の傾向は、後世の美術教育史研究の大変興味ある事象になるであろう。筆者も善し悪しや自分との関わりからではなく、純粋な歴史研究的関心がある。ちょうど戦後体制の崩壊が始まり、社会の諸分野で体制が維持できなくなり、社会党から首相を選ぶなど体制側からの融合を始めたことと対応しているのではないかと思うからである。その間の学習指導要領も民間で主張されたような内容を基本に据え、文部省もそのような方向で指導する。主張内容の攻守交代である。ゆとり教育も、該当学習指導要領が発表された日の新聞を見ると、教育現場の多くが反対するなか官僚主導でゆとり教育へ転換したとある。面白そうだと思った方はこれを研究してみるとよいと思う。

第35回美術科教育学会
島根大会（最終案内）

実行委員長　佐々有生（島根大学）

倉澤 實（故　島根大学教育学部名誉教授）「発展」：松江市くにびきメッセ前

第35回美術科教育学会島根大会は2013年3月28日（木）、29日（金）の両日、島根大学松江キャンパスにおいて開催いたします。日程、内容、口頭発表の詳細が決定しましたのでお知らせいたします。

■主催：美術科教育学会
■共催：島根大学
■後援：島根県教育委員会、島根県造形教育研究会
■会期：2013年3月28日（木）、29日（金）
■会場：島根大学教育学部
■大会テーマ
「神々の国、しまねで美術教育の理論と実践を結ぶ」

2012年、島根県は、古事記編纂1300年を記念して「神話博しまね」を開催しました。また、同年は「想画」の実践者として、我が国の図画教育に大きな足跡を残した青木實三郎が奥出雲の馬木小学校に赴任して100年目に当たります。奥出雲町では、地域の方々を中心に発起人会が構成され、11月、青木の業績を称え、将来に伝承していくために、馬木の地で顕彰碑の建立等の顕彰事業が行われました。

「定休日じゃないです。人がいないだけです。」などと、日頃は自虐的アピールをしている島根ですが、2013年は、出雲大社で60年に一度の「平成の大遷宮」が行われます。島根には、「怪談」の再話で有名な小泉八雲が教壇に立った松江など、自然美溢れ、歴史ある文化の香る地が多々あり、改めてこの地の心地よさ・地方の豊かさを再確認させられています。そして、「神々の国しまね」として節目に当たる同年度、第35回美術科教育学会島根大会が、この地で開催できることに不思議な「縁」・「結びつき」を感じています。

さて、今日、わが国の学校教育は大きな転換点を迎え、教育学研究に対しては、これまで外側からの調査・研究による「現実がいかにあるか」を実証する段階にとどまり、実践の中で「どのようにすればよいか」等の具体的課題の解決をめざす研究がきわめて少ないと指摘されてきました。一方、学校現場では、教科の本質・目標・内容等を前提として、教育内容をいかに効率よく、わかりやすく教えるか、その指導のあり方等を主体にした実践的な研究傾向にあるといわれます。美術教育においても、未だその壁の隔たりは大きいものがあり、両者の教育研究の乖離の克服は、もはや望めないのでしょうか。

本大会テーマは、「美術教育の理論と実践を結ぶ」と設定してみました。本大会では、とりわけ「結ぶ」をメインのキーワードにと考えます。「縁結び」で知られる出雲大社を由来としますが、今ある混沌とした教育状況を乗り越えるには、実は「結ぶ」・「つなぐ」力が今後の重要な鍵・手がかりになるのではと思うからです。

無論、本大会テーマにおける美術教育の「理論」と「実践」を「結ぶ」には、二者の同化を意味するものはありません。本来、教育は、「教師の教える活動」と「子どもの学ぶ活動」等、矛盾・対立を孕んだ営みです。美術教育にも、多様な研究領域・分野があります。それが内向きにではなく、さらに美術教育等を超えた異なる学問分野へと、学際的な結びつきをとさえ望んでいます。むしろ、より異質なるもの同士を意識的に「結ぶ」・「つなぐ」ところにこそ、近未来の美術教育の地平を拓く力が秘められていると期待します。

新たな美術教育のありようを模索するに当たって、「神々の国しまね」の地へ集うことが「結ぶ」・「つなぐ」力を意識する一歩になると念じながら、全国各地からの多くの方々のご参加・研究交流等をいただき、少しでも美術教育の展望が開かれるよう願っております。どうか、よろしくお願いします。

■日程

平成25年3月27日（水）　理事会等

10:00～14:00	学会誌編集委員会
14:30～18:00	理事会

平成25年3月28日（木）　大会第一日

8:30～9:30	受付
9:30～11:45	研究発表I
13:00～13:40	開会行事・総会
13:50～14:50	３学会連携行事
15:00～16:30	研究部会A
16:40～17:45	研究発表II
19:00～21:00	懇親会（松江東急イン）

平成25年3月29日（金）　大会第二日

8:30～9:00	受付
9:00～11:50	研究発表III
13:00～14:30	研究部会B
14:40～15:45	研究発表IV

■主な内容

◎ 研究発表：65件の口頭発表を予定しています。
◎ ３学会連携交流事業（交流会）：
　　3月28日（木）13:50～14:50
◎ 研究部会：3月28日（木）15:00～16:30
　　3月29日（金）13:00～14:30

■参加申し込み方法

⑴ 学会参加費：5,000円
　懇親会費　：5,000円
　　（現職派遣の方を除く大学院生は4,000円）

⑵ 参加申し込み最終期限と参加費・懇親会費の払い込み最終期限：**平成25年3月15日（金）**

＊参加申し込み及び参加費の払い込みは、本学会通信発送時に同封させていただいている払込取扱票に必要事項をご記入の上、お振り込みください。参加費の振り込みによって、学会参加申し込み手続きとさせていただきます。
＊参加費払い込み用の払込取扱票を紛失された方は、郵便局にある払込取扱票をお使いください。その際は、必ず払込取扱票の通信欄に「参加費　5,000円」「懇親会費5,000円」などを明記してください。

口座記号・番号：01370-5-101923
加入者名：第35回美術科教育学会島根大会

＊通信欄に、ご住所、ご所属（大学院生の場合は、「院生」と明記をお願いします）、お名前、電話番号等をご記入ください。
＊当日受付も可能ですが、大会運営上できるだけ事前申し込みをお願いします。なお、参加申し込み最終期限の3月15日（金）以降は口座に振り込まず、当日受付にてお支払いください。

■宿泊先

宿泊については各自で予約してください。代表的なホテルを学会通信第81号にも掲載しましたので、参考になさってください。

■移動手段

◇自動車を利用
＜岡山より東からの場合＞　中国自動車道（落合JCT）→米子自動車道（米子JCT）→山陰自動車道（安来道路）→山陰自動車道（無料区間）→松江中央ランプ

＜広島より西からの場合＞　中国自動車道（三次IC）→国道54号線→山陰自動車道（三刀屋木次IC）→松江中央ランプ

◇航空機を利用
※松江駅から空港に向かうバスの松江駅出発時間は、飛行機出発時間の８０分前（出雲空港、米子空港とも）です。

ＪＡＬをご利用の場合（出雲空港利用）		ＡＮＡをご利用の場合（米子空港利用）	
東京（羽田）⇔出雲空港	約１時間25分	東京（羽田）⇔米子空港	約1時間15分
大阪（伊丹）⇔出雲空港	約１時間	名古屋⇔米子空港	約１時間5分
福岡⇔出雲空港	約１時間５分		
※出雲空港連絡バスで松江駅まで約30分		※米子空港連絡バスで松江駅まで約45分	

◇列車（JR）を利用

東京⇔松江（約６時間）	大阪⇔松江（約3時間２０分）	福岡⇔松江（約4時間３０分）
東京→岡山・・・新幹線 岡山→松江・・・JR伯備線	大阪→岡山・・・新幹線 岡山→松江・・・JR伯備線	福岡→岡山・・・新幹線 岡山→松江・・・JR伯備線

◆JR松江駅から島根大学までの経路
○松江市営バス
北循環線内回り　島根大学前下車・・・所要時間約15分
大学・川津行　島根大学前下車　・・・所要時間約20分
※他に「平成ニュータウン」「あじさい団地」「東高校」などもあります。
○一畑（いちばた）バス
美保関（みほのせき）ターミナル行　島根大学前下車・・・所要時間約20分
マリンゲート行　島根大学前下車・・・所要時間約20分
○タクシー　・・・所要時間約10分

問い合せ先：大会運営事務局
実行副委員長　　川路 澄人
〒690-8504 島根県松江市西川津町1060
島根大学教育学部 初等教育開発講座
TEL&FAX 0852-32-6368
E-Mail kawaji@edu.shimane-u.ac.jp

第35回美術科教育学会島根大会　研究発表等一覧
■大会 第1日　3月28日（木）

	第１会場	第２会場	第3会場	第4会場	第５会場
テーマ別	鑑賞教育・美術館教育	図工・美術科授業研究	教員養成	海外の美術教育	美術館教育
9:30～10:00	対話による学習方法のもつ学習過程の触発性について-鑑賞学習と算数学習の相互行為を通して- 本間美里（大田区立矢口小学校）	ゲルハルト・リヒターを通じて抽象絵画教育を考える２ 湯川雅紀（和歌山県立田辺高等学校）	教育実習の実際と指導に関する考察 春野修二（福岡教育大学附属小倉中学校）	国際バカロレアにおける美術教育-初等課程プログラム（PYP）を中心に- 小池研二（横浜国立大学）	美術館・大学・学校の連携，それぞれの学びと気づき～須田悦弘展の鑑賞プログラム実践を通して～ 神野真吾（千葉大学）・縣拓充（日本学術振興会特別研究員）・山根佳奈（千葉市美術館）
10:05～10:35	対話型鑑賞における「学習者同士の相互鑑賞支援」に関する一考察 平野智紀（経営学習研究所）三宅正樹（京都造形芸術大学）	生徒の自己意識と自画像の指導 西公美・前田基成（女子美術大学大学院芸術文化専攻美術教育研究領域）	教育実習に基づく「美術教育論文」作成とその意義 新関伸也（滋賀大学教育学部）	韓国の初等教育における第１次教育課程「美術科」に関する研究-教科目標の韓・米・日比較を中心に- 千凡晋（東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科芸術系教育講座）	美術館での鑑賞体験の教育効果についての測定　～須田悦弘展の鑑賞プログラム実践を通して～ 神野真吾（千葉大学）・縣拓充（日本学術振興会特別研究員）・笹本博紀（千葉市立大宮台小学校）
10:40～11:10	半開きの対話-対話型鑑賞における美学的背景についての一考察- 北野諒（京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター）	小学校１年生と２年生の意味創造型理解の特徴-絵画を用いた検討- 若山育代（富山大学）・森敏昭（広島大学）	初等教育教員養成における教科教育法の授業に関する実践的考察（4）-協同的な学びの導入- 吉田貴富（山口大学教育学部）	InSEA設立への「アメリカ」の関与について 大島賢一（信州大学教育学部）	作家と美術館の連携による教育普及活動-安芸高田市立八千代の丘美術館における教育普及活動- 森長俊六（広島大学附属中・高等学校）
11:15～11:45	表現とナラティヴトークで深める鑑賞能力の考察 立川泰史（東京学芸大学附属小金井小学校）	鏡による空間認識から発展する表現活動の研究 清田哲男（川崎医療福祉大学）	図画工作科の授業研究体制の有効性と課題～聞き取り調査の分析を通して～ 隈敦（富山大学人間発達科学部）	美術教育のアセスメント-日米の比較を通して- ふじえみつる（愛知教育大学）	ワークショップを通して学生と出会うという体験を考える-子どもアート・カレッジ2012におけるオート・エスノグラフィー- 笠原広一（福岡教育大学）
11:50～13:00	昼食				
13:00～13:40	**開会式・総会**				
13:50～14:50	**3学会連携行事**				

	第１会場	第２会場	第3会場	第4会場	第５会場
15:00～16:30	美術教育史研究部会	高校美術研究部会	乳・幼児造形研究部会		
16:40～17:10	阿部七五三吉の手工教育における実践方法について 平野英史（東京学芸大学大学院）	テイト･ギャラリーの教育普及から学ぶこと-Verbal Eyesなどの教育プログラムを中心に- 山木朝彦（鳴門教育大学）・井上由佳（文教大学）・塚田美紀（世田谷美術館）・酒井千波（テイト・ギャラリー）	３DCG表現指導における協同学習の成立 上山浩（三重大学教育学部）	モルディブ共和国における美術教育実践に関する質的研究 箕輪佳奈恵（筑波大学大学院教育研究科教科教育専攻芸術科教育コース）	「高齢化」に関連する美術教科書掲載作品の研究 山口喜雄（宇都宮大学教育学部）
17:15～17:45	工部美術学校の教育課程における石膏像素描 瀬谷裕美（茨城県立取手松陽高等学校）	美術館展解説図録にみる主題・題材概念－大英博物館展，ベルリン美術館展，マウリッツハイス美術館展図録から－ 山田一美（東京学芸大学）	造形実験装置による巡回式ワークショップ・プログラムの開発研究～アートツール･キャラバンによるアートを“ひらく”試み～ 大泉義一（横浜国立大学）	アメリカの美術館教育の発展の内的・外的要因について（現代～） 烏賀陽梨沙（同志社大学（嘱託講師）龍谷大学（非常勤講師））	ものづくりの責任（倫理）に関する研究-アイヌ民族の伝統的造形「口琴」の教材化を通してー 佐藤昌彦（北海道教育大学）・宮脇理（元･筑波大学）

■大会 第2日　3月29日（金）

	第１会場	第２会場	第3会場	第4会場	第５会場
テーマ例	鑑賞教育・美術館教育	図工・美術科授業研究A（デジタルイメージ・工作・工芸 など）	図工・美術科授業研究B（造形遊び・造形活動・あそび など）	教員・プロジェクト など	特支・子ども・アート教育 など
9:00～9:30	鑑賞と表現のカリキュラムの立案及び評価に関する研究～順助性に注目して～ 若井ゆかり（鳴門市立鳴門西小学校）	３DCGのリテラシー再考 浅野恵治（東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科）	造形遊びの授業分析 桐田敬介（上智大学大学院総合人間科学研究科教育学専攻博士後期課程・日本学術振興会特別研究員DC1）	高等学校美術教師の自己内省モデルの検討 奥水愛子（筑波大学大学院人間総合科学研究科博士前期課程）	重度・重複障害児の造形活動の指導原理・方法に関する質的研究 池田吏志（広島大学）
9:35～10:05	幼稚園の年中児と年長児における言葉の比較と援助-幼児が絵画をみて楽しむ鑑賞教育の実践事例を通して- 丁子かおる（和歌山大学）	高校生の制作したデジタルイメージに関して-素材の物質性の観点から- 足立元（日本文理大学）	造形遊び実践に基づく，幼小の個別性と連続性についての考察 山田芳明（鳴門教育大学）	美術教育の題材づくりに関する一考察（２）-教師が題材づくりに必要と考える力をきっかけとして- 相田隆司（東京学芸大学）	病弱･身体虚弱教育における造形教材集づくりの視点 髙橋智子（静岡大学教育学部）

	第１会場	第２会場	第3会場	第4会場	第５会場
10:10～10:40	美術作品の様式を言語化して感受理解させる鑑賞教育-SD法による仏像感情の調査を中心に- 有田洋子（島根大学）	映像メディアを活用した美術科学習活動の可能性-広島県中学校写真教育の現状をふまえて- 岡本太郎（広島大学大学院教育学研究科）	図画工作科における造形あそびの一考察～低学年の色あそびに着目して～ 竹谷摩維子（東京都府中市立新町小学校）	アートプロジェクトの授業導入に関する考察 三橋純予（北海道教育大学芸術課程）	知的障害児における美術を媒体としたコミュニケーション教育-ワークショップの構造を視点とした行動分析- 森芸恵（筑波大学大学院教育研究科）
10:45～11:15	ポール・ゴーギャン作『アレアレア』の鑑賞における美的特性の感受と主題感受の調査研究 立原慶一（宮城教育大学）	子どもと教師と作家を対話で結んだ美術鑑賞教育-ICTを活用した工芸作品の美術鑑賞教育を通して- 向角典倫（東近江市立朝桜中学校）	粉からつくる土粘土遊びの実践研究 江村和彦（名古屋経営短期大学）	「美術と福プログラム」における共同制作（2） 葉山登（横浜創英大学）	からだ・気づき・対話のアート教育Ⅱ 郡司明子（群馬大学）
11:20～11:50	ドメニコ・ギルランダイオの礼拝図２点の読解的鑑賞（試案）-テキスト，図像学，アトリビュート（象徴的持物）- 岡田匡史（信州大学教育学部）	STEAM教育による生活世界の創造的展開 安東恭一郎(香川大学)・Kim,Jeonghyo（韓国教育課程評価院）	粘土遊びの指導方法に関する一考察 藤原逸樹（安田女子大学教育学部）	伝統文化の教材化をめざす教員支援プロジェクト-岡山県立美術館制作の“スゴ技ながもち”の活用にむけての実践- 山口健二・赤木里香子・大橋功（以上，岡山大学教育学部）・平田朝一（岡山県総合教育センター）	子どもの世界をつなぐ媒体としての造形行為についての一考察-子どものふるまいの変化と他者への広がり- 神保悠（兵庫教育大学大学院連合学校）
11:50～13:00	昼食				
13:00～14:30	工作・工芸領域部会	現代＜A／E＞部会	授業研究部会		
14:40～15:10	l'amour de l'art 再読-ブルデューにみる美術鑑賞と文化資本 結城孝雄（東京家政大学）	中学校技術分野との関連を配慮した木工作-小学校中学年の実践を通して 蝦名敦子（弘前大学教育学部）	「遊び」を活かした美術教育実践の構想（1）-大阪児童美術研究会と乾一雄の美術教育の構想- 宇田秀士（奈良教育大学）	子供造形ワークショップにおける様々な素材と技法 小島雅生（東海学園大学教育学部教育学科）	子ども・若者の変容と美術教育の役割 荒川洋子（東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科(新潟市立赤塚中学校））
15:15～15:45	つながる鑑賞法を用いた美術館学習支援 奥本素子（総合研究大学院大学）	造形活動における児童の感受を通した芸術発信Ⅱ 竹内晋平（奈良教育大学）	幼児の遊び場面における体験と自他の位置づけ-描画表現プロセスの再考- 片岡杏子（日立家庭教育研究所）	表現教育における子ども達の「挑戦」と「試行錯誤」-ドイツ芸術教育学者Ｅ.レットガ-を手掛かりとして- 安部順子（堺市立晴美台中学校）	今，改めて図工美術教育の目的を考える 矢木武（東京学芸大学）

＊プログラムの内容については変更する場合があります。

第７期美術科教育学会役員選挙の実施経過（報告）

選挙管理委員長　水島尚喜（聖心女子大学）

学会次期理事選挙の実施経過について概要を以下に報告致します。

1. 選挙公示

『学会通信・第80号』(2012/6/25発行)に告示

美術科教育学会「会則」、同「役員選出規程」、同「役員選出に関する細則」に基づき、美術科教育学会の役員(理事)選挙を行うこと。等

2. 投票期間

2012年 10月の１ヶ月(10月31日消印有効)

2012年1月1日現在において、２年以上の会費滞納のない正会員に対して投票用紙を送付。

3. 開 票

2012年 11月 11日(土)　13:30 ~17:00

(聖心女子大学)

以下の選挙管理委員会員により、立会人仲瀬律久(聖徳大学)のもと、開票作業が行なわれた。

相田隆司(東京学芸大学)
新井哲夫(明治学院大学大学)
島田由紀子(和洋女子大学)
水島尚喜(聖心女子大学)
結城孝雄(東京家政大学)　　（以上５名）

4. 開票結果

＊有権者への投票用紙郵送総数 507
＊投票総数 178（35.1%）
＊無効票数 7 (8名以上の記入 6票、無記入 1票)
＊有効票数 171

5. 理事候補者への通知と承諾

開票後、直ちに選挙管理委員会を開き、得票順に上位15　名を選出し、選出された会員に対して理事就任の承諾を求めた。その結果、全員の理事就任の内諾を得た。

6.開票結果報告会

2012年12月24日(月／祝)15:00~17:00

(明治学院大学)

＊選挙管理委員会は、選出された理事候補者を招集し、開票結果報告会を開き報告。
＊投票結果の報告会後、投票によって次期代表理事候補者を決定。
＊規程に従い、必要に応じて理事候補者の補充（推薦理事）、監事の選出等の業務を代表理事候補者に一任。
＊新理事・監事候補者は、3月島根大会の総会において承認を得て、4月から新体制に移行。

以上

2012年度美術科教育学会地区会 in 大阪 [絵画・以降]の時代に構想する絵画教育—ビジョンとカリキュラム— 報告

コーディネータ　理事　永守基樹（和歌山大学）

去る2012年12月22日、大阪芸術大学ほたるまちキャンパスにて、97名の参加を得、表記の地区会が開催されました。本稿はその報告ですが、当日の発表と論議は重要な課題を多く含み、語られた内容を整理してご報告する状態に未だ至っていません。以下に会の輪郭と概要を記し報告に替えさせて頂きます。

尚、地区会開催に先立って研究概要集をweb上で公開し、当日の論議の深化を図りました。内容については概要集をご参照頂ければ幸いです（本学会ＨＰからもリンクしています）。

http://www47.atpages.jp/wart/

1. 経緯

今般、多くの方々のご助力で地区会を開催することができました。かつての「出前シンポ」以来、本学会は地域の美術教育との架橋を大切にしてきました。今回の地区会主題「[絵画・以降]の時代に構想する絵画教育」は、和歌山の教育現場と和歌山大学美術教育学研究室との連携研究の場である「和歌山大学美術教育研究会」のなかで形成されたものです。美術教育の実践と理論は「題材・カリキュラム」によって関係づけられると筆者は考えていますが、この研究会での題材・カリキュラム開発の試みは、2012年3月に会誌『美術教育実践研究』の創刊号としてまとめました。その内容への批評を頂くための小シンポジウムが本地区会の原型です（シンポの記録は地区会研究概要集に資料として掲載）。本地区会では各地から発表者・コメンテイターに参加を頂きましたが、地域の実践と理論の世界を結びつけようとする企画です。

2. 趣旨

今回の主題は、[近代・以降]の美術教育が抱える諸問題を、[絵画・以降]の絵画教育に焦点化したものです。何人もの方から「いまどき[絵画教育]を何故？」という問いを頂きましたが、[近代・以降]の美術教育を構想する時も、「絵画」をどのように位置づけるかが、美術教育の最大の課題になると筆者は考えています。

この20年ほどの美術教育研究の大きなトピックスは「鑑賞教育」と「ワークショップ」でした。現代において重要な課題ですが、双方とも美術教育の内容を構成する力は脆弱です。

今回論議された「絵画」は、既に特権性を失った伝統的な表現の形式・ジャンルです。しかし、筆者は、1970年代以降に解体と溶解を続けている美術教育に、第一に歴史性を回復させるため、第二にディシプリンを再構成していくために、モダニズム絵画を基軸とする美術教育の内容論からのアプローチが不可欠だと考えています。

今回は、和歌山大学美術教育研究会での絵画の題材・カリキュラム開発の一部を基調提案とし、招待発表として三世代を代表する絵画教育者にそれぞれの絵画教育を提案して頂きました。招待発表は結果的に全員が教員養成系の大学で絵画を担当する画家であり研究者である三方に依頼し、基調提案と招待発表を美術教育の中長期的な課題に導く視点の提供者として、それぞれ専門の異なる四方にコメンテイターをお願いしました。

３．発表と討議

[基調提案]

理論的枠組みについて永守基樹から、絵画のモダニズムを美術教育の基礎と基本の部分に組み込むことを提案。そのカリキュラムモデルを示すとともに、それが美術教育の歴史性を回復させ、ディシプリンの形成を可能にすることの提言を行いました。

具体的な題材開発と実践例を通しての基調提案としては、西井惠美子氏からは、身体感覚的な造形遊びから絵画へと展開する題材と、色とかたちへの感覚的アプローチからＦ・ステラの絵画をモデルにした[図]として成立する絵画教育への展開を提案。湯川雅紀氏からは抽象画教育として、Ｇ・リヒターを参照した絵画制作（スキージによる絵の具を引き延ばす制作）を、現代において美術教育がモダニズムに対して持ち得るアプローチの例として提案がなされました。

[招待発表]

大嶋彰氏はフォルマリズム以降の平面の多様性を追求する仕事で知られていますが、絵画平面での追求と深く

関わるかたちで、その絵画教育を語り、教員養成と子どもの教育への探求を語られました。絵画平面における地と図の転換や、その構築と脱構築という活動が、「言語学的転換」以降の思想圏における「私」のあり方の探求と重ね合わされた場所に[絵画教育]の形成を見る姿勢は、ラディカルであり、同時に正当なものとの思いを深めました。

かつて解剖学を専攻した渡邊晃一氏は、西洋と日本の差異を踏まえつつ[絵画]を解剖し、[絵]と[画] へと解体。[絵]＝ペインティングと[画]＝ドローイングへと腑分けすることのなかで、身体と言葉・文化を結びつける絵画教育を語られました。一旦解体されたものから、それぞれが絵画を生み出すというビジョンは多方面に示唆を与えるものでしょう。

喜多村徹雄氏は現代美術をめぐるモダニズムとポストモダニズムの動きを手際よく整理した上で、エゴフーガル（長谷川祐子）とマイクロポップ（松井みどり）の二者を援用して、近代的自我を回避しつつ共同性を形成する道を示し、そのなかでドローイングが重要な創造の方法であることを示されました。モダニズムをプレとポストのはざまに相対化し、自在な表現が可能な現代にあって、絵画教育を[表現教育]、[表現史教育]、[鑑賞教育]という並列的な三者のなかで構想していくことは多くの共感を得たと思われます。

[討議]　（司会：佐藤賢司氏）

以上の提案に対して、先ず四名のコメンテイターからの発言、続いて提案者の応答というかたちで論議が行われました。

山木朝彦氏からは各提案へ補足的説明を求める的確な質問、岡本康明氏からは美術教育の制度への批判意識を踏まえつつドローイングの可能性から絵画教育を問い直す発言、小澤基弘氏からは、自身の表現体験や学生の指導を通じて[初発の動機]の重要性の指摘が、小野康男氏からは美術教育の意義（象徴化・歴史化・個体化）を記憶の痕跡が残されている平面を見出すなかで再考することが、それぞれ語られました。

その後の論議は、本稿では触れ得ませんが、絵画教育、美術教育、美術教員養成に関わる多くの課題、そして教科教育学と教科内容学との対話に関する重要な課題が見出されました。論議はその緒に就いたばかりで時間切れとなりましたが、今後、様々な機会を通じて継続的に論議をしたいと考えています。

子どもの初期の描画活動と絵画は分けて考えるべきであり、前者を捉え直す作業によって絵画や彫刻などが、それぞれの歴史を作り直していくこと。小野康男氏が論議のまとめの発言で示されたこの課題は、美術教育における歴史性とディシプリンの形成という本地区会のパースペクティブに、確かな方向性を与えたものと考えています。

末筆ながら、ご発言やご寄稿を頂いた方々、企画運営にご協力を頂いた方々に心から御礼を申し上げます。

概要とプログラム

■日時：2012年12月22日（土）12:30-17:00
■場所：大阪芸術大学ほたるまちキャンパス
　　（大阪市福島区堂島）
■主催：美術科教育学会
■共催：大学美術教育学会・日本美術教育学会・
　　和歌山大学美術教育研究会
■参加者：97名

(1) 開会　司会：宇田秀士（奈良教育大学）
■挨拶　金子一夫　代表理事（茨城大学）
■挨拶　花篤　實　元代表理事
■コーディネータ趣旨説明：永守基樹（和歌山大学）
(2) 研究発表　司会：永守基樹
■基調提案1—理論的枠組みから
[絵画・以降]の時代に構想する絵画教育—[零度の平面]と[零下の平面]をめぐって
永守基樹（和歌山大学・和歌山大学美術教育研究会）
■基調提案2—題材実践を通して
造形遊びから絵画教育への道筋を探る
西井惠美子（和歌山市立松江小学校・和歌山大学美術教育研究会）
■基調提案3—実践例に基づいて
ゲルハルト・リヒターを通じて抽象絵画教育を考える
湯川雅紀（画家・和歌山県立田辺高等学校・和歌山大学美術教育研究会）
■招待発表：提案１
教員養成と絵画教育　「本当の私」を起点とする絵画教育からの脱却をめざして　－＜子ども＞という他者に降りるために
大嶋　彰（滋賀大学）
■招待発表：提案２
現代〈絵・画〉の解剖学— 身体、視覚、言語 との関わりから
渡邊晃一（福島大学）
■招待発表：提案３
モダニズムで生じた展開とポストモダニズム的拡散から構想する体系的な制作体験型絵画表現史の試み
—表現とディシプリンの狭間で—
喜多村徹雄（群馬大学）
(3) 討議　司会：佐藤賢司（大阪教育大学））
■コメンテイター：岡本康明（京都造形芸術大学）
　　小野康男（横浜国立大学）
　　山木朝彦（鳴門教育大学）
　　小澤基弘（埼玉大学）
(4) 閉会
■閉会の言葉：宮脇　理　元学会代表理事

企画運営委員：末延國靖（大阪芸術大学）、宇田秀士（奈良教育大学）、佐藤賢司（大阪教育大学）、竹内晋平（奈良教育大学）、丁子かおる（和歌山大学）、渡邊美香（大阪教育大学）

幼稚園黎明期における造形表現の特質とその展開過程に関する研究－明治期の幼稚園における図画教育を中心として－

牧野由理（東京都市大学）

はじめに

文部科学省『幼稚園教育要領』（平成20年）において、領域「表現」は「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して，豊かな感性や表現する力を養い，創造性を豊かにする」[1]としている。「描く・つくる」という子どもにとって本能的な行為は現在の幼稚園教育ではこの領域「表現」に含まれているが、幼稚園の黎明期であった明治期にはどのような造形教育が行われ展開していったのか。本研究では、明治期における幼稚園教育の造形表現の特質とその展開過程を、当時出版された幼稚園教育書、翻訳書、雑誌、保育記録、作品、各地の幼稚園で使用していた一次史料の分析を通して明らかにしたい。本研究については科研によって進めており[2]、本稿ではその研究成果の一部である「明治期の幼稚園における図画教育史」についてその概要を報告する。

欧米から幼稚園に導入された図画教育、そして日本独自の保育法へ

日本においてどのように幼稚園の図画教育がはじまったのだろうか。我が国において、はじめての公的幼稚園である東京女子師範学校附属幼稚園がつくられたのは明治9（1876）年のことである。この時期の幼稚園は、ドイツの教育学者でありキンダーガルテン（幼稚園）の創設者でもあるフレデリック・フレーベル（1782-1852）の影響を受け、恩物中心主義の保育が行われていた。欧米先進諸国の幼稚園を例としたにもかかわらず、幼稚園の実際を見聞した者は稀であり、幼稚園発足にあたり外国書を翻訳し参考とした。日本最初の幼稚園教育書といわれるロンゲ夫妻の共著である『幼稚園』は桑田親五によって翻訳され、図画教育に関しては「図を引く業」とし紹介された。図版部分は「幾何圖」とし幾何図法についての詳細な解説文を載せている。原著と翻訳された『幼稚園』を比較すると解説文・図版ともにほぼ同一である。

その当時の図画教育の様子については武村耕靄による「幼稚保育之図」によってうかがい知ることができる。明治20年頃の東京女子師範学校附属幼稚園の様子を描いたものだが、女児が「図画」を行う際に左側に手本を置きそれを見ながら罫線が引かれた石盤に石筆で描いている。図画は重要なものとして位置づけられていたにもかかわらず、幼児の発達にそぐわない教育方法がとられていた。

明治後期になると形骸化した恩物による教育方法が問題視され、幼稚園に批判が集まることとなる。文部省令第32号「幼稚園保育及設備規定」に４つの保育科目「遊嬉・唱歌・談話・手技」が示され、図画も「手技」の一つの課目として位置づけられる。日本独自の保育法が展開され、「随意」つまり自由に描くことや、幼児の自発的な表現活動の重要性が提案された。明治前期までみられたような幾何図は見られなくなり、白紙に毛筆で描かれた図版があらわれる。では「随意」に描くとはどのようなものだったのか。

保姆の保育記録からみる図画教育

明治期の幼稚園で行われた図画表現の実態を解明するために、全国に先駆けて設立された幼稚園の一つであり明治13（1880）年に開設された愛珠幼稚園（現・大阪市立愛珠幼稚園）の保育記録を分析した。

愛珠幼稚園には明治37年から41年までの保姆による保育記録「保育日記」が残されている。これらを分析すると、図画である「画方」は年間を通して「随意」で行われており「幼児ノ希望ニ従ヒテ随意ナル画ヲ書シム」というように自由に描かせていたことがわかった。「随意」において、「鳩、亀、雪、鰯、家、人、旗、竹馬、兵隊」や「英国旗、風船、国旗、海軍旗、雪、猫、狸」といった身近にあるものや戦争に関連するものを描いており日露戦争の影響によるものと考えられる。また「画方」を独立した課目として行うだけでなく、他の手技課目である「箸排べ（はしならべ）」や「縫取（ぬいとり）」と関連させて直線の組み合わせを描かせるといった工夫がなされていた。

また保育項目の一つである「談話」と図画を関連させ、「談話」で取り扱っていた桃太郎の話を「画方」に関連付けて円形の黍団子や桃を描かせていたことがわかった。他にも談話で使用される「参考書絵画」を見せて描かせていたと記録にあるが、「参考書絵画」が談話の掛図をさすのか談話の本の挿絵をさすのかは不明である。

手本としては自然物の実物を示したり、課目「縦覧」の後に「画方」を行ったり、縦覧室（標本室）の標本を示したりしながら描かせていた。自然物などの実物や標

本等を手本として描かせるという実物主義は、恩物中心主義への批判から見出されたものだろう。

明治期の幼児の図画作品

愛珠幼稚園には明治期に描かれた希少な幼児の図画作品「第五回内国勧業博覧会記念帖」[3]および「日露戦争記念帖」が現存しており、「日露戦争記念帖」は前述した保育記録と同時期に描かれたものと推測される。和綴じの帳面に収められており、ほとんどの作品が白紙に鉛筆で描かれている。

「第五回内国勧業博覧会記念帖」は52作品あるが、1作品のみ色鉛筆を使って描かれている。博覧会場正門を描いた作品が最も多いが、それ以外はウォーターシュートやイルミネーション、水族館、大林高搭、メリーゴーランドなどの余興を描いたものが多い。ルネサンス風の正門という特徴的なデザインや、余興といった娯楽性の高い大衆的なものに幼児が着目し描いていたことがわかった。

「日露戦争記念帖」は白紙に鉛筆で軍艦が描かれ、その半分以上が交戦中の様子を描いていた。軍艦そのものを丁寧に描いている作品もあり、幼児が軍艦そのものの形体に強い興味をもって描いていたことがわかった。軍艦の一部分だけを描く構図や、遠方に斜めに複数の戦艦を配置し遠近感を表現するといった特徴的な構図がみられ、ディティールの細かさや基底線・遠近法の有無を総合して考えると５歳児の作品である可能性が高い。ディティールの描きこみ方から、幼児が軍艦に憧れや強い興味を抱いていたことは明らかである。愛珠幼稚園では実物主義をとっていたことが前述の保育記録から示唆された。戦争に関する図版を愛珠幼稚園で保有していたことが備品目録からわかっており、戦争を描く際にも実物主義をとっていた可能性がある。

幼稚園の図画教育で使用された教具

明治期に開園した幼稚園を対象とし、明治期の幼稚園の図画教育で使用されたと推測される現存する掛図や絵、標本などの教具の調査を行っている。特に掛図に関しては、印刷物だけではなくその地域の日本画家が描いた掛図や絵が京都府加佐郡舞鶴町立舞鶴幼稚園（現・舞鶴市立舞鶴幼稚園）で発見された。京都という土地柄もあるだろうが、地域出身の画家の作品を直接見ることにより、幼児の図画表現形成の一端を担っていたといえるだろう。

おわりに

明治期の幼稚園で行われた図画教育は、小学と同じように欧米からの摂取により導入され、抽象的な幾何図形を写すという方法をとっていたが、明治後期には自然物そのものや写実的な標本を使用していた。また肉筆の掛図や絵が幼稚園にあったことも明らかとなり、その写実性から、幼児期から本物に触れさせる・本物に近いものに触れさせるという方法を採用していたことがわかった。フレーベルの抽象的な図形による恩物主義からの離脱によって実物主義へと変容する過程であったことが示唆された。

「自由に描いてほしい」という願いは明治期も現代も同様である。しかしながら美術教育の専門家ではない保姆にとって困難な道のりであったことは想像に難くない。保育記録からは試行錯誤しながら保育に取り組む様子、文書類からは図画教育者・手工教育者による講習会への保姆の参加を知ることができる。図画教育者・手工教育者の幼稚園教育への関与も精査していく必要がある。

明治期において幼稚園が設置される際には小学に附設されることも多く、小学と幼稚園の行事を連携して行っていたことも記録に残されている。幼小連携が当時から一部では行われていたことを考慮し、今後は幼稚園のみならず小学との比較研究も取り扱っていきたい。

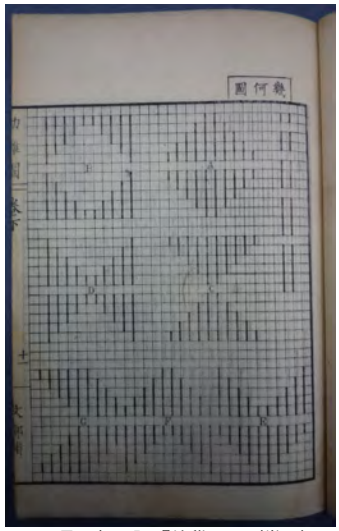

図1　桑田親五訳『幼稚園』（巻下）「幾何図」，1878

図2　武村耕靄筆「幼稚保育之図」（1890年）の一部，お茶の水女子大学附属図書館所蔵

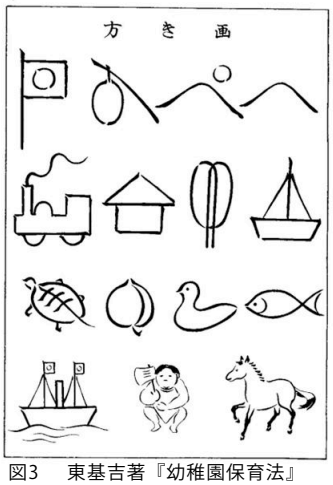

図3　東基吉著『幼稚園保育法』「畫き方」，1904

1 文部科学省『幼稚園教育要領』フレーベル館，2008，pp.11-12
2 「幼稚園黎明期における造形表現の特質とその展開過程に関する研究」平成23‐25年度科学研究費若手研究（B）課題番号23730844
3 第五回内国勧業博覧会は明治36（1903）年3月1日～7月31日まで大阪で開催された博覧会である。

CMSによるWEBサイトの構築と活用
～美術における協働のために～

伊藤裕貴（福井県立藤島高等学校）

1　はじめに

子どもたちによる“学び合い”の概念を中心に据えた教育論が広まる中、教員間の学び合い（＝協働）によるスキルアップにも注目が集まっている。しかしながら、美術という教科の場合、一校に教員一人ということが多く、容易に美術教員同士がコミュニケーションをとれる状況にない。さらに、小中学校や高等学校の間での連携教育が叫ばれてはいるが、近隣の学校同士でも顔を合わせる機会がほとんどない状況がある。そうした中、充実した美術教育を行うために、WEBサイトを利用することによって“縦”と“横”の軸を繋ぎ、交流を促進し、お互いの研鑽を深める取り組みの可能性について、いくつかのアプローチで、研究をしている。

2　WEBサイトの運用と活用

(1) WEBサイトでの教育コンテンツ共有

2008年、県の教育研究所に配属された私は、CMS（Contents Management System）[1]という比較的容易にWEBサイトを構築できる仕組みを用いて、かつてはブログとよばれる不特定多数を相手にした個人サイト中心であった情報交換の場を、公的な立場で、教員専用のサイトを作成し運営することで実現しようとする試みを始めた。

同年、県教育委員会主導の下、CMSを用いた指導案や教材・教具の共有化に向けたプロジェクトの一員としてサイト構築の研究に着手、翌2009年に「教材研究支援システム」と銘打って、県内小・中・高教員向けのサイトの運用が開始された[2]。美術に限らず、全ての教科についてキャビネットを用意し、県内教員から秀逸なコンテンツの提供を受け、また必要とされる教員に配信する。美術では、その前年から冊子として作成していた授業実践報告をデータ化し、数十件を掲載することからスタートした。

(2) 県内教員専用SNSの創設

同システムでは、コンテンツ利用の敷居を下げる目的でアカウント設定数を限定しているため、個々が情報交換することはできない。次に着手したのは、そういった“教員同士の話し合いの場”としての機能を備えたいわゆるSNS（Social Networking Service）の構築についての研究である。まずは、１教員１アカウントを割り当てた初任者用サイトの構築を提唱した。初任者研修受講に伴い受講者全員を対象にサイトを利用してもらうというもの。トップには初任者研修のための連絡板を配置し、メンバー同士が自由に情報交換できる掲示板や教材コンテンツ等を共有できるキャビネット等を設置。2009年の12月から試験運用を開始し、翌年４月からは本運用を施行した。サイト内で研修の質問などを受け付け、提出物やアンケート回収なども行うなど、一定の運用実績を上げるとともに、初任者同士の情報交換による“横”の繋がりの一助となったことも、事後アンケートで検証された。

(3) 教育研究会サイトの創設

次なる企画こそが、本意であるの情報交換サイトの構築である。そのために、福井県高等学校教育研究会のサイトを創設するという方策を採った。これは、同教育研究所が行っている学校向けのホームページ作成支援事業に乗っかるかたちで実現可能であった。美術だけでなく、国語や数学をはじめとして、同研究会内のすべての部会ページを用意。それぞれの運用は各教科部会にゆだねることとした。2010年にまずは美術部会が先陣を切って試験運用を開始。その検証結果をフィードバックし、翌2011年に各教科部会への開設の説明を行った。その後、引き続き全部会を包括するサイト管理者として、共用スペースに掲示板を設置し、県内高校教員の教科の垣根を越えた情報交換についても研究を継続している。

(4) 美術部会サイトの活用

各教科部会とも、個人IDでログインして交流できる“グループスペース”と、ログインなしで誰もが閲覧できる“パブリックスペース”を利用できる。美術部会では、例年、高等学校総合文化祭での生徒作品の写真データをCDに記録し配付していたが、2011年より、部会サイトのパブリックスペースに掲載することとした。CMSのメリットを利用し、各校の部活動顧問がそれぞれ撮影からアップロードまでを行う。これにより、業務の分担にもなるとともに、閲覧の自由度が格段に増し、広くインターネットを通じて同部会の活動をPRできるようになった。

グループスペースでは、全国レベルの研究大会[3]へ向けた準備のサイトを設け、大会テーマや分科会設定の議論や大会準備委員会の各部局の書類データ保存にも利用、同部会員全員が閲覧できる。また、メール添付では送れない大容量のファイルのアップロードも可能なため、県レベルの造形教育研究大会では、小・中学校教員が利用できるページを臨時に開設し、作品スライド資料の回収に利用した。

(5) 授業の幅を広げる分解型指導ユニットと小中高の連携した教育のために

現在、福井県教育研究所の研究員と、県内の小・中・高の教諭10名からなるグループにより、小中高の一貫した図工、美術教育を“指導ユニット[4]”作成によって充実させようとする研究が進行中である。

指導ユニットとは、従来の授業指導案を、「発想」、「技能」、「鑑賞」の要素に分解し、それぞれを１枚のユニットにまとめたものである。これらを要素ごとに整理して保管し、使う側は、複数のユニットを組み合わせて構成することで、１つの題材を作りあげることができるようになる。

各ユニットの作成にあたっては、それぞれを学習指導要領の示すねらいのなかでの位置づけを表で確認した上で、検索キーワードとしても利用する。中・高のユニットでは、道具や場の設定から、目標、評価基準、活動内容はもちろん、「これまでに学習しておきたいこと」欄と「さらに発展」欄を設け、前後の校種との連続性を意識するひな形を用意した。高校用のユニット作成は、高教研にて協力を要請していて、部会員の一人ひとりが自分の授業を省察し、基本的な活動要素を抽出してくることになっている。各々は小中学校での活動を想定しながら授業を分解。さらに分解されたユニットを自由に再編成することにより、他教員の経験を自分の授業に生かしやすくなる。

これらのユニットは、前述の同研究所「教材研究支援システム」にてWEB上にキャビネット保管される予定である。

さらに、並行して高教研美術部会のサイトでも配信を計画している。こちらでは、すべてのユニットをさらに項目ごとに整理し、データベースで管理。キーワード検索によって、さまざまな条件での一括抽出が可能になる。校種別のフォルダに分別された個別ファイル配信に比べ、小中高の連続性を直接把握しやすく、それぞれの現場での的を射た指導につながることが期待できる。

(6) 美術教員グループ展の企画、運営

前述とは意趣の違った取り組みとして、福井県内の高等学校の美術教員を中心に、中学校、特別支援学校の教員を交えた有志で自分たちの作品の制作と発表を行ってきている[5]。このグループ展では、教育現場に似たスタイルでの運営を行っており、共通のテーマが毎回もうけられ、各自の解釈で作品を制作する。授業において題材のテーマが与えられるように、キュレーター役の教員が主導することによって展覧会の企画から展示までが学び合いの場になっている。

この運営に不可欠な議論や情報交換を、前述のグループスペースに設けた同グループのサイトにて行っており、高教研サイトの研究運用に際してその検証の中心となってきたのがこのグループでもある。

3　美術教員交流の展望

横のつながりが広がりつつある現在の福井県内の公的な教員用サイトは、縦の連携が課題となっている。高教研サイト構築の当初は、その中に小中学校の教育研究会も包括できるかたちで基本設計をしていた。しかし私が同研究所を離れた後、管理上の問題から小学校と中学校の教育情報交換サイトがそれぞれ別立てで構築され、現在はお互いのサイト内には入れない構造になっている。これからは、美術科として、異校種の壁を乗り越えてつながることのできるサイトをつくり上げていくことが望まれる。しかしながら本県にはそのための組織がないのが現状であり、その体制づくりを模索中である。

また、別の取り組みとして、近県の美術関係者が参加する有志の研究会[6]サイトも立ち上げた。美術科教育における校種や自治体、さらには教員の枠組みを超えた協働の可能性を模索しながら、これからのWEBサイトの有用な活用について研究を継続していきたい。

註）

1) 国立情報学研究所が無償で提供しているCMS“Netcommons2.0”を福井県教育研究所の独自サーバにインストールして使用。

2) 2009年6月、学習指導案や教材・教具等約1,400件のコンテンツを前掲サーバ内にアップしてスタートした。2012年12月現在では約4,000件を掲載している。

3) 2015年8月に、全国高等学校美術、工芸教育研究大会福井大会が予定されている。

4) 野村由香里「『図工・美術指導ユニット』―図画工作科・美術科・芸術科美術教育をつなぐ支援システム―（仮題）」福井県教育研究所研究紀要118号，2013-3月（予定）

5) 「BJ美術準備室」と称し、「発表・発見・発展の場」として1999年より隔年で展覧会を催している。高校教員の参加率は高く、2012年には大阪でのサテライト展示も行った。

6) 福井、石川、富山の中学校・高校の美術教員、行政職員、および大手教科書会社の当県担当者を交えた研究会「FITの会」。

美術科での多文化教育授業事例
-自律的協同学習(Coop Coop モデル)を中心に

朴 香淑（多摩美術大学）

I. はじめに

A. 研究の必要性及び目的

多文化社会は文化的に異なる構成員で成り立つが、自国の文化を中心的に捉える存在が、自身の文化と相異なる文化集団に対して偏見と固定観念を形成し、ひいてはこのような偏見と固定観念に根拠した葛藤と差別現象を発生させるようになる。 単一民族であることを誇り、伝統文化を維持・継承・発展させてきた韓国社会は、近年他国民と共に生きることを余儀なくされ、教育現場もまた多文化教育という新しい要求に直面するようになった。しかしながら韓国では多文化的家庭に育った学生と伝統的家庭に育った学生がお互いを尊重しながら生きてゆくことができる学習環境、特に教授学習支援がなされていないのが実情である。

今日、多様な文化の混在の中で自国の伝統文化に対する関心と現代的多元主義を標榜した文化的相対主義は芸術界でも多くの談論を惹起させている。文化的多様性を反映した美術教育は学生たちに多様な美術文化に対する知識、他の文化的背景を持った人間に対する理解、美術文化における比較体験は勿論、文化的アイデンティティを養わせると確信している。同時に、文化的非主流学生たちにも自身の文化に自信を持たせることができる。美術教育は美術が持った本質的な特性によって学生たちに多文化的な視野を持たせるのに十分な教科と言える。

ここに本研究では中学校3年生を対象にした多文化教育を基礎とした協同学習プログラムを開発・適用し、その授業の効用性を立証することに目的を置く。

B. 研究内容及び方法

本研究の主題である Coop Coop 協同学習を中心にした中学校3年生の多文化的接近授業の内容及び方法を次に示す。

第一、文献研究として関連学問の先行研究を考察により多文化教育に対する概念と教育目的を明らかにし、これを土台とした多文化教育を効果的に適用することができるモデルを探る。

第二、 理論的研究を土台に Coop Coop モデルを適用した多文化教育教授学習プログラムを開発し、実験集団には多文化的接近授業を実施し、統制集団には伝統的な教授法で授業を実施する。

第三、 Coop Coop 協同学習モデルを中心にした多文化的接近授業が中学校3年生学習者の多文化意識の下位領域にある文化的アイデンティティと文化的多様性に及ぶ影響を調べるため、ユネスコ韓国委員会で研究した'国際理解教育の実態と国際比較研究'(1995)、Ponterotto(1995)、多文化主義に対する態度を測定する質問項目（朴ヨウル、2010）、及び、アイデンティティ目標領域に合わせた質問項目（呉ウンスン、2008）を追加・補完・再構成した後、授業適用事前、事後に実施する。

次に実技結果物などに対する質的分析を実施した研究の Coop Coop 協同学習を中心にした多文化的接近授業の実効性を検証する。

Ⅱ. 理論的背景

A. 多文化教育の理解

• 多文化教育の概念

多文化教育は青少年にとって多様な民族、人種、階層、性別、地域などによって発生される多様な集団の文化を理解する能力と文化的価値を尊重する態度を育て、文化的差異によって発生される偏見や葛藤問題に対して積極的に対処する能力を涵養すると定義する。

• 多文化教育の目標

先行研究を土台として学生自身の'文化的アイデンティティ'、及び、学生が属する社会の'文化的多様性'を探ることを目標とする。

• 美術科と多文化教育の内容

すべての時代、すべての文化、すべての階層の美術を美術教育の対象とする。

B. 多文化教育と協同学習

• 多文化教育に協同学習を適用する理由

外国の多くの研究で多文化教育における協同学習が人種間の行動と学業成就度に肯定的な効果があると明かされている。韓国では呉ウンスン(2008)が先行した研究で多文化教育を行ったことがある専門家集団にアンケートを実施した結果、 多文化教育の教授学習方法で協同学習が一番効率的だと判明された。

• Coop Coop（自律的協同学習）モデルの特徴

゜学生たちの自然な好奇心、 知的能力、 表現力を導き出して伸ばせることを強調

゜ 競争がない純粋な協同体制(グループ内での協同、グループ間での協同)

゜学習する主題を直接選択(内在的動機誘発)

゜ 集団構成員の責務性を高める(集団主題->小主題)

゜学生たちの高次元的な思考力伸張を助長(討論->意思決定)

゜集団の成功に寄与(望ましい自我象)

• Coop Coop モデルによる世界文化地図製作

• Coop Coop モデルによる世界文化地図製作時に予想される教育効果

゜自ら選択した国の文化を内在的動機を持って調査しながら選択した国の新しい文化を積極的に理解することができる。

゜グループ内の討論を通じて選択した国の多様な文化を共有した後、グループの国文化地図を製作することができる。

゜グループごとに発表をしながら他のグループが調査した他の国々の多様な文化を理解し、学習全体の世界文化地図を製作することができる。

゜クラス全体が‘世界文化地図’を製作することでグループ内、グループ間の多様なコミュニケーションを通じて積極的に授業に参加し、世界文化の多様性を体験することができる。

III. 研究方法

• 研究対象: 中学校 3年生　満 15歳

(韓国　S特別市　E中学校　実験クラス３７人　統制クラス３８人)

゜教授-学習指導計画

- 1次~3 次: PPTと動画<鑑賞授業>/- 4 次 ~6 次: 世界文化地図製作<表現授業>/- 7 次 ~8 次: 発表、 鑑賞、 評価

グループ: 選択した国の文化の調査　－協同－国文化地図

クラス: グループ別　国文化地図 + グループ別国文化地図―世界文化地図

Ⅳ.終わりに

研究過程を土台とした研究結果は次の通りである。

第一、多文化的接近授業を受けた実験集団が伝統的な授業を受けた統制集団より文化的アイデンティティ及び文化的多様性の面で高い増進をみせた。

第二、 主題表現、表現方法、造形要素と原理、表現材料と用具、発表及び討論の5部門を7質問項目に分けて質的敍述分析した結果、多文化的接近授業を通じて製作された教授学習作品結果物である世界文化地図は統制集団に比べて‘表現能力’の‘主題選定’能力及び表現力において高い評価点を得た。

第三、 多分化的接近授業を通じて実験集団と統制集団の自身の評価検証で実験集団の結果が最も高く出た。二つの集団の検証で自己評価の下位領域である方法側面、製作側面、討論側面で皆統制集団に比べて高い評価結果を見せた。

第四、多文化的接近授業を施した実験集団の授業満足度を調査した結果、全体的に授業に対する満足度が高く出た。

結論的に本研究の Coop Coopモデルを中心にした多文化的接近授業は学習者の文化的アイデンティティと文化的多様性を向上させるのに肯定的な結果を現わしたことが分かる。したがって本研究は多文化的授業が学習者の多文化的意識を涵養するのに教育的効果があることを検証したという意義があり、中学校美術教育の現場で多文化教育の活用ができるという基礎資料として意味がある。

[参考文献]

呉ウンスン(2008).多文化教育の為の教授・学習支援方案Ⅱ.社会科教授―学習開発プログラムを中心に.韓国教育課程評価院.

Banks, James A.(2006). Cultural diversity and education: Foundation, curriculum, and teaching. Boston: Pearson Education, Inc.

Joseph G. Ponterotto, Alan Burkard, & Brian P. Rieger(1995). Development and Initial validation of the Quick Discrimination index(QDI). Educational and psychological measurement. 55(6), 1016-1025.

McFee, J. King(1991). Art education progress: A field of dichotomoes or a network of mutual support. Studies in Art Education.

美術教育における小中連携の実現に向けて
―「キモチカルタであそぼう」の題材開発と教師間のネットワーク構築から見えてくるもの―

光山 明（茨城県古河市立駒羽根小学校）

はじめに

義務教育の９年間の学びを一体的にとらえ、小中連携あるいは小中一貫の教育を推進することは、今日における重要な教育課題のひとつである。

小学校の図画工作と中学校の美術についても、図画工作から美術に接続する一連の学びとしてとらえる視点が重要といえる。宇田秀士は、小学校から中学校という学校種を超える教育構想を持った実践が少ないと指摘した上で、「現在の姿を大切にしながらも、それを支える過去から未来につながる子どもたちの学習歴／生育歴を考慮した美術教育が求められている」と問題提起し、いくつかの実践例を報告している。[1)]

こうした状況を踏まえ、ここでは、筆者の拙い実践を美術教育における小中連携という切り口から振り返ることで、課題と可能性を検討したい。

中学校から小学校へ

文部科学省は、小学校と中学校などの校種をまたいだ人事異動を行うことを推奨している。全国的にはこれらの人事交流に消極的な行政もあるようだが、茨城県は長年、積極的かつ計画的に実施してきた。筆者自身も中学校の美術教師として19年間勤務した後、24年４月より小学校へ異動となった。

異動の理由は、主に次の２点である。

① 中学校美術科で進めてきた研究を、小学校においても発展的かつ継続的に行いたい。

② 図画工作科の内容を通して、感性や創造性の基礎を育てる教育に関わりたい。

筆者が中学校美術において重点にしていたのが表現主題の問題で、主題を生み出すための具体的な学習指導について研究を進めていた。[2)] 中でも「夢、創造や感情などの心の世界」を表す内容に興味があった。

内面をテーマにした題材の授業設計でいつも立ちはだかる問題は、一言で言えば、自らの内面に向きあうことに戸惑いや拒絶を感じる生徒への援助の在り方であった。多くの生徒にとって、美術表現を通して心と向きあう経験は初めてのことであり。拒否反応が起きても不思議ではない。

そして、子どもがこうした表現に価値を見いだし、積極的に学習に向かうためには、その前段階として、感性に響く経験や材料や道具との出会いが重要だ。そう考えると、子どもが内面世界と出会う「思春期」の段階、すなわち小学校高学年から中学生にかけての時期を連続した成長過程ととらえ、美術教育を見つめ直す必要があると考えた。それには小学校での実践を踏まえる必要があった。

小中の接続を意識した題材開発

（１）題材「キモチカルタであそぼう」の誕生

小学校の図画工作科と中学校の美術科では、その発達段階に合わせ、指導内容が異なっている。しかし、両教科における教育課程の連続性、関連性について検討することも重要であろう。ここでは一つの題材の実践から小中連携の可能性を検討してみたい。

中学校において、自らの内面世界や詩・音楽などから発想し、いわゆるモダンテクニックなどを活用して抽象的に表現するという題材がある。中学校美術科としての目標を達成するためには、単なる思いつきや造形的なおもしろさから発想・構想するのではなく、自己と他者との関係で主題を見いだしたり、色や形などの組み合わせを論理的に構成したりすることが求められるであろう。表現の技能においても、それまでの道具や材料の豊富な経験を基に、自らの意図に合う表現を追求できる授業が構想できる。

こうした中学校美術科での子どもの学びのイメージを念頭に、小学校での題材を開発し実践してみたらどうか。そのような着想で本年度、小学校第５学年の題材として実施したのが「キモチカルタであそぼう」である。高学年では徐々に自己の内面世界に対する関心が高まり、感情を概念的にとらえたり、色や形などの具体物と結びつけて考えたりすることができるようになる。こうした時期をとらえて、ゲームの要素を取り入れた活動で楽しさを味わいながら、感情をテーマにした表現のおもしろさに気づかせたいと考えた。

学習活動の大まかな流れは以下のようになる。

題材「キモチカルタであそぼう」（全３時間）
１［導入］感情を単純な線で表す体験（0.5時間）
２［表現］キモチカルタをつくる（1.5時間）
・気持ちを表す絵や模様を絵の具でかく
・絵と組み合わされる言葉を考える
※絵札と読み札がペアになるカードを４組つくる。
３［鑑賞］キモチカルタであそぶ（１時間）
・「つながるゲーム」
※先に出された絵札との共通点をグループに伝えながらテーブルに置いていく活動。
・「カルタゲーム」
※読み札に対応する絵札を当てる活動

キモチカルタの作例

題材を構成する上でのポイントをまとめてみる。

・カルタというゲーム性を取り入れることで、楽しみながら活動できるようにする。

・感情を色や形で表現するために、事前にごく単純なドローイングの訓練を行う。

・感情やイメージと造形表現を結びつけて考えることのおもしろさに気づかせる活動にする。

・ただし、児童の個々の感情や内面世界について省察させるような活動にはしない。

・カルタゲームを通したコミュニケーションによって、お互いの表現の意図やよさを味わう効果的な鑑賞が実現できるようにする。

（２）授業実践を終えて

カルタづくりをしている児童らは、感情をテーマにした抽象的な表現に抵抗なく取り組めていた。むしろ落書きに近い感覚で自由に表現できることを楽しんでいるようだった。児童らの「絵札」の表現と対応する「読み札」の言葉からは、感情と色や形を関連づけて表現しようとする意図が読み取れ、一定の成果を確認できた。

また、カルタゲームの活動は楽しかったようで、それぞれのグループからの笑い声や歓声が教室に響いた。カルタゲームはゲーム性の強い活動であったので、鑑賞のねらいを明確にするために、該当するカードの作者が自分の作品について、意図や感情のイメージを説明するというルールを付加した。

学習後の子どもたちのふり返りでは、「人によって感情の表し方が違うことが分かった。」「みんなのいろいろな感情が絵に表されていておもしろかった。」「いろんな感情にちなんだ色や筆遣いが、これを（この活動を）通してだんだん分かってきた。」などのふりかえりが確認できた。楽しんだだけでなく、ねらいに沿った学びが達成されたことが伺えた。

（３）未来につながる美術教育

本授業で５年生の児童が、内面世界をテーマにした表現に抵抗なく取り組めたのは、この課題が要求していた学びのハードルが高すぎなかったからとも言える。中学の美術で、社会や他人との関わりの中で自己を見つめ、内面的な表現を強いる題材にいきなり出会うよりも、この時期に一つのステップとしてこうした学習を積んでおくことは意義のあることなのではないか。また、小学校高学年という思春期の入り口に立つ子どもたちにとって、内面世界に思いを巡らせながら造形表現することへの興味を喚起できたとすれば、題材を取り上げる時期が適切であったといえよう。この経験が、中学校美術の学習において、より複雑な主題の探求に生かされると予想するのは、想像が過ぎることではない。

小学校の教師が図画工作の実践の中に、未来の学びへとつながる種をまき。中学校の教師が、その経験を基により発展的な学びへと結実させる。そうした理想を有効性のある実践の中に生かすためには、図画工作科・美術科それぞれの教師が、教科の特性と教育理念を共有し合うこと、さらには、小中連携への意識を持ちながら学習カリキュラムの改善に努めることなどが課題としてあげられるだろう。

先生たちの美術展

続いて、本年度新たに立ち上げたプロジェクト「先生たちの美術展」[3]を紹介する。ひとことで言えば図画工作・美術指導に携わる教師による美術展覧会である。教師自身が作品を通して、社会にメッセージを発信すると共につくりだす喜びを味わう。こうした経験は、感性や知識を刷新するとともに表現の技能を向上させる。美術教師としての素養の幅が広がることは、子どもたちへの指導にも生きるはずである。また、本展覧会では子どもたち向けのワークショップなどの教育プログラムを計画している。教師らと地域の美術館が連携することによって、新たな教育実践が生まれることを期待している。

本展にはもう一つの目的があると考えている。それは地域の図画工作科・美術科に関わる教師らによる共同的な学びの創造である。図画工作・美術にかかわる教師が展覧会という目的で集い、小中学校の枠を超えたネットワークを構築して学び合うこと。こうしたことは、地域の教育力の向上を図る上でも価値のあることだと考えている。

まとめ

本報告では、小中連携という切り口から自身の実践をふり返った。授業実践の報告にとどまらず、別の角度からもこの問題について考える必要があったことが、そのままこの問題の複雑性を示しているとも言える。そうした意味からも、国、県などの教育行政の連携、学校間の連携、個々の教員間の連携など、さまざまな方面からのアプローチが必要である。

そして、考えてみれば、連携を円滑に進める基本にあるのは異なる立場同士の相互理解である。その根本は人と人が理解し合うことである。そのためには個々のレベルからグループ、そして大きな組織へと連携していくネットワークを、こつこつと築いていくことが大切なのかもしれない。授業を通して子どもたちと連携すること、隣にいる同僚と連携すること、目の前の子どもたちが進学する中学の美術教師と連携すること、数え始めたら次々に課題が見えてくる。それだけ連携すること、ネットワークを構築するという行為は際限なく広がる可能性があるということもいえる。

１）宇田秀士「図画工作・美術科教育における〈小中連携／一貫教育〉の現状と課題」『美術教育学』29号、2008年３月、pp.103-116

２）詳細は、光山明「表現主題を多様な視点から分析的に検討させる学習指導の試み－題材「ねがいをかなえるお守り」におけるワークシートの開発を通して－」『美術教育学』33号、2012年３月、pp.201-214

３）「先生たちの美術展」へは、17名の近隣の小中学校の教職員が参加予定。

会期：2013年2月26日～3月3日、会場：古河街角美術館

「造形芸術教育連絡協議会」からの報告

事業部担当理事　藤江 充（愛知教育大学）

平成24年度の「造形芸術教育連絡協議会」、略称「3学会協議会」が以下のように開催されましたのでご報告します。出席者の敬称は省略します。また、今回は教育美術振興会に会場を提供していただきました。

日　時：平成24年12月8日（土）午後1時～4時半
会　場：「教育美術振興会」会議室
（東京・台東区浅草橋）
出席者：日本美術教育学会（神林、大橋、新関）
大学美術教育学会（大嶋、山田、相田、藤江）
美術科教育学会（金子、新井、[藤江]）

◎報告　各学会の現状と課題

○日本美術教育学会

平成24年度は選挙による役員選出が行われた。地区単位からの選出も合わせて16名の役員で構成される。8月には名古屋市で大会を開催した。会長、事務局体制は継続する。

○大学美術教育学会

平成24年10月の大分大会（大分大学）では200人の参加。来年度は京都（京都教育大学）で10月11-12日に開催予定。多様な専門家のいる部門との関連を生かした活動を進めたい。

○美術科教育学会

来年4月以後の役員選出の選挙が終わり、12月24日に選出理事による初の会議が東京（明治学院大学）で開催される予定。70歳以上の会員は被選挙人名簿掲載を辞退できるようにした。規程等の整備をした。

・各学会からの報告で共通の課題として、類似の、又は、同一の論文を複数の学会に投稿した場合の扱いについて、この連絡協議会で調整をする必要性が確認された。

◎議題

[1]　3つの学会の共同研究をベースにした科研の申請について以下のように報告され承認された。

基盤研究（B）「高度な専門性を有する教員養成のための美術教育プログラムの開発と研究」

（研究代表者：新関伸也[滋賀大学]）期間：平成25～27年

・教員養成のプログラムの開発、海外からの招聘、外国の事例研究等

・メンバーは、申請時の当連絡協議会の構成員

[2]　3つの学会の共同事業をベースにした出版事業について

・教員養成の修士必修化に対応した美術教育関係図書を3学会の共同事業として刊行する。

・学部レベルの一般学生向きではなく、大学院、初任者、中堅教員など美術教育の実践と研究をさらに深めていくことを支援し、実践者、研究者にとって必要な内容を精選して整理していく。

・今後は頁数や頁レイアウトなどを確定しながら、内容、執筆者についても詰めていく。

・科研が採用されれば、その研究成果を公表するためにも、それをこの出版物に反映させていく。

・美術教育研究にとって今後のスタンダードなるものを目指す。

[3] 今後の当連絡協議会の運営と事務局体制など

・事務局に関しては、今年度は大学美術教育学会の担当で藤江が事務的な調整をしたが、この会も3年目で各学会の事務局担当が一巡した。また、あらためて日本美術教育学会が、来年4月から担当になり、任期2年で、美術科教育学会、大学美術教育学会のローテーションで交代することが確認された。

（確定）平成25-26　日本美術教育学会、平成27-28　美術科教育学会、平成29-30　大学美術教育学会

・学術会議などで美術教育関連学会を統合した窓口として、この協議会を発展させていく時期などを視野に入れた行程表を検討することも必要であることが確認された。

本部事務局よりお知らせ

平成22年度より三年間、任期中は大変お世話になりました。新しい本部事務局につきましては、引き継ぎ完了次第、学会ウェブサイトや次号学会通信等でお知らせする予定です。

総会・委任状　担当：新井（明治学院大学）

次回総会は、第35回美術科教育学会島根大会の第一日、2013年3月28日（木）の午後１時より開催予定です。会則で定めているように、総会は、学会の事業及び運営に関する重要事項を審議決定する学会の最高議決機関であり、会員の５分の１以上（委任状を含む）の出席がなければ成立しません。

総会に欠席される方は、同封の委任状（官製はがきに印刷されたもの）に必要事項を記入、押印の上、3月19日までに投函してください 。

会費納入　担当：新井（明治学院大学）

■ 納入金額

未納分がある場合、　学会通信送付時の**封筒宛名ラベル**に、納入金額を示してあります。未納の方は、至急納入をお願いいたします。

■ 振り込み先

＊銀行名：ゆうちょ銀行
＊口座番号：００１９０-９-７２７５３４
＊口座名称：美術科教育学会本部事務局
＊年会費：正会員 8,000円　　賛助会員 20,000円
＊通信欄：「2012年度会費」等、会費の年度を記入。

他行からゆうちょ銀行に振り込まれる場合は、下記の内容を指定してください。

＊店名（店番）：〇一九（ゼロイチキュウ）店（019）
＊預金種目：当座　　＊口座番号：０７２７５３４

■ ご注意

＊学会誌への投稿及び学会での口頭発表に際しては、申込みの時点で「①　会員登録をしていること」「②　当該年度までの年会費を納入済みであること」の二つの条件を満たしている必要があります。
＊会費を２年間滞納した場合は、会員資格を失います。

■大学院生等への会費減額措置（申請は毎年必要です）

大学院生等は、所定の手続きにより、年会費を半額（4,000円）に減額する措置を受けることができます。申請期間は、当該会計年度5月の一ヶ月間（新入会者は入会時）です。平成25年度分の申請をされる方は期限にご注意ください。手続きの詳細ならびに申請書式は、学会ウェブサイト（「学会概要」→「会則・諸規程」→「大学院生等への会費減額措置に関する申し合わせ」）で入手できます。

会員登録　担当：石崎（筑波大学）

■ 入会申し込み

入会を希望される方は、学会ウェブサイトより入会申込書をダウンロードしてご記入の上、事務局（担当：石崎）あて郵送してください。入会には、会員一名の推薦（署名捺印）が必要です。入会資格認定の後、事務局より年会費を請求します。会費の払い込みをもって入会となります。

■ 住所・所属等変更、退会手続き

ご住所、ご所属先等に変更のあった方は、すみやかに事務局（担当：石崎）までご連絡ください。退会を希望される場合は、電子メールではなく、必ず文書（退会希望日を明記してください）を郵送にてお送りください。あわせて在籍最終年度までの会費納入完了をお願いします。

学会通信　担当：直江（筑波大学）

現本部事務局による学会通信の発行は、本号が最後になります。三年間のご協力、誠にありがとうございました。

ウェブ・広報　担当：大泉（横浜国立大学）

学会ウェブサイト、ならびに学会から社会への発信について、お問い合わせやご意見等がありましたら、ウェブ・広報担当へお寄せください。

美術科教育学会本部事務局　www.artedu.jp

■ 代表理事　金子一夫
kaneko@mx.ibaraki.ac.jp　TEL 029-228-8256　〒310-8512　茨城県水戸市文京2-1-1　茨城大学 教育学部
■ 総務担当副代表理事　新井哲夫
tarai@psy.meijigakuin.ac.jp　TEL 03-5421-5311　〒108-8636　東京都港区白金台1-2-37　明治学院大学 心理学部
■ 会員登録　石崎和宏
ishizaki@geijutsu.tsukuba.ac.jp　TEL 029-853-2707
■ 学会通信　直江俊雄
naoe@geijutsu.tsukuba.ac.jp　TEL 029-853-2821
〒305-8574　茨城県つくば市天王台1-1-1　筑波大学 芸術系
■ ウェブ・広報　大泉義一
oizumi@ynu.ac.jp　TEL 045-339-3453　〒240-8502　横浜市保土ヶ谷区常盤台79-2　横浜国立大学 教育人間科学部